

ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼツケンドルフ
ザクセン選帝公・ブランデンブルク選帝公枢密参議官
ハレ大学初代カンツラー 一六九二年没

ヨハン・マティアス・シュレツク

川 又 祐 記

この偉大なる人物は、フランケンにおける貴族の家系から生まれた。その家系は、同地で八〇〇年来栄えており、きわめて有力な官職をつかさどって、数多くの分家に拡大していった。自分の母親を通じて彼は、シユマルカルデン戦争の有名な將軍ゼバスト・シエルテルン (Sebast. Scherteln) の系統を引くことになった。ゼツケンドルフは、一六二六年二月二〇日、ヘアツオーゲン・アウラハ (Herzogen-Aurach) に誕生した。彼の父親ヨアヒム・ルート

ヴィヒ (Joachim Ludwig) は、ヘアツオーゲン・アウラハの地方長官 (Landeshauptmann) で、同時にバンベルク司教の主馬頭 (Stallmeister) であつたが、その後スウェーデン軍に従軍し、一六四二年、命を落とした。それゆゑに彼の息子は、大部分、母親の監督下で育てられることになつた。彼は、コーブルク、ミュールハウゼンそしてエアフルトで師を得て、一〇歳にして二つの學術語およびヘブライ語について相当の知識を獲得した。その後彼は、ゴータ公エルンスト敬虔公 (Herzog von Gotha, Ernst der Fromme) と知り合い、公は彼に、一六二九年からコーブルクのギムナジウムで教育を受けさせて、ゴータのギムナジウムへ連れてきた。もう一人の重要なパトロンとしてゼッケンドルフは、陸軍大将モルテーン (General Mortaigne) を得た。彼はゼッケンドルフをシュトラスブルク大学に通わせ、ゼッケンドルフは三年間をそこで過ごした。

ゼッケンドルフは、シュトラスブルクを再び去つたとき、二〇歳そこそこであつた。しかし彼は、それまで、市民の出自をもつ人物と同様に、貴族に必要とされる見事なほどの勤勉さで、勉強したのであつた。その際彼は、自分の家系、すなわち彼の祖先たちによる功績を想起してもらうことを通してだけではなく、自分自身の學識と分別を通して、名誉職や公式の報酬〔を得る〕権利を得ようとしたのである。彼はその当時、すぐにこれらを手に入れた。ヘッセンダルムシュタット方伯 (Landgraf von Hesse Darmstadt) はなるほど、彼を自分の親衛隊准士官 (zum Fähnrich bey seiner Leibwache) に任命した。だがモルテーンは、この仕官が彼の才能にとつて満足のいく活動場所ではないと判断した。そこでゼッケンドルフにそれを断らせたのであつた。それに比べて、旧くからの恩人であるエルンスト公は、彼を自分の参議官 (Rathe)、そして小姓 (Hofjunker) にした。多くの理由から賢明なる人と呼ばれたり、敬虔なる人と呼ばれたりするのが常であつた、この有名で尊敬すべき君主は、この若い貴族をあまりに早くから仕事に巻き込む

つもりはなかった。実際、信心と博識の学び舎であったエルンスト公宮廷は、ゼッケンドルフ自身にとってもそうであつたに違いない。エルンスト公はゼッケンドルフを、すべての仕事から自由にさせておき、學問に専念させた。エルンスト公は、時間をこうした意図に用いるために、ゼッケンドルフに時間を割り振つた。そして毎日曜、ゼッケンドルフはエルンスト公に、有益なものを讀んだことを説明して、それらに関する自分の意見を述べなければならなかつた。そして時として、宮廷法、国家法の疑問に答えねばならなかつた。それに、君侯図書館の利用と、エルンスト公参議官たちとの有益な交流とが付け加わつた。

ゼッケンドルフが、こうしたまれな、そして徹底的なやり方によつて心構えができあがつた後、エルンスト公は、彼に国事に関心を抱かせた。エルンスト公は一六四八年に彼を自分の侍従 (Cammerherr) に任命した。そして彼を数回、公使として派遣した。その三年後、枢密ラーツコレギウム (seheimes Rathscolligium) の四人のメンバーによる試験の後、エルンスト公は彼に枢密ラーツコレギウムにおける役職を与えた。彼の官吏としての能力を正確に評価して、そして彼の任用を有益に利用することを心得ていたまさにこの主君は、それに続いて自分の御料地 (Cammergüter) の監督を彼に委ねた。そしてついにエルンスト公は、彼を自分のカンツラー (Canzler) に選任することによつて、一六六三年、彼をランデスコレギウム (Landescolligien) の頂点に据えた。それより前に、アルテンブルク公 (Herzog von Altenburg) もまたイエナ宮廷裁判官 (Hofrichter zu Jena) の職を彼に依頼した。

彼の才能には到達しえないとても沢山の人たちは、自分たちに対する多くの職務や仕事が多すぎると考えることはそれほどないであろうし、そしておそらく、私たちが日々見ているように、沢山の人たちは、より多くの仕事を求めたであろう。だがまさに、特別の勤めを通じて増やされたこうした「仕事の」過剰こそが、他の原因と合わせて、

ゼッケンドルフにとっては、それを軽減してもらえるようにするための行動理由となった。それは、誠実な人間が自らに命ずる忠実さをもってしても、とても多くの勤めをつかさどることができないと彼が考えたからであった。一六六四年、これらを辞職した後、彼はザクセン・ツァイツのモーリッツ公 (Herzog Moritz von Sachsenzeit) の下でカンツラーおよび宗務庁長官 (Canzler u. Consistorialpräsident) の職を受諾した。一六六九年ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルク二世 (Churfürst von Sachsen Johann Georg II.) が彼に枢密参議官という頭職をかなりの俸給で与えた。そしてまさに名誉あるこの職をアイゼナハ公 (Herzog von Eisenach) が彼に授けた。その直後、ザクセン・ゴータのエルンスト公が亡くなった。ゼッケンドルフが所領も持っていたゴータに対するゼッケンドルフの功績は、エルンスト公の後継者フリードリヒ (Friedrich) が、ゼッケンドルフを領邦金庫長官 (Landschaftsdirektor) に任命するということで思い出されることになった。彼は数年後、アルテンブルクの収税長官 (Director der Herzogl. Steuernahme im Altenburgischen) にもなった。しかも彼は、この職の要求を満たすことができるように、ザクセン・ツァイツ公に奉公を解いてくれるよう求めたが、だめであった。「なぜなら」それは、公の一六八一年の逝去まで承認されることはなかったのである。今やゼッケンドルフは、アルテンブルクにほど近い、自分の愛すべき所領モイゼルヴィッツ (Meuselwitz) に赴いた。そしてその地に居城を建設した。そこで彼は、自分の余生を、礼拝に静かに捧げ、学問への愛情で過ごすことを考えた。有名な英雄にして政治家フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・ゼッケンドルフ伯 (Graf Friedrich Heinrich von Seckendorf) は、ゼッケンドルフの弟の子息であることを今、説明しておこう。後にプロイセンの王冠を被ることになった、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ二世 (Churfürst von Brandenburg, Friedrich der III.) が、自分の創設したハレ大学のカンツラーに、枢密参議官という名誉ある職といっしょにゼッケンドルフを招聘した時、彼はモイゼ

ルヴィッツですでに多年を過ごしていた。こうした種類の提案と、彼が構想していた計画は、騒々しい宮廷業務よりも、ずっと簡単に調和することができた。彼はその職を受諾して、一六九二年、ハレへ赴いた。ハレでは、すぐに特別の審理が依頼された。いわゆる敬虔派の訴訟によって私たちの教会はその当時、猛烈な批判にさらされていた。一部の我が教員たちには、次のことを信じる理由があつた。教会は、崩壊していた敬虔の念に関する現実的改良、また、とてもためになるとは思われていなかった説教〔術〕の改良、そして、将来の神学者にほとんど寄与していない大学における教育方法の改良、を必要としている、と。彼らは、これらの改善を、新しいそして強力な施設によって、しかも教育方法それ自体のいくつかの変更を通して実現しようとした。そのグループには、私たちの教会の通常の構造や、信仰を覆すつもりであるという疑念が、あまりに早くから投げかけられていた。彼らの中に、ハレ大学の第一級の教員たちがいた。ハレの聖職者たちは、それゆえ、様々な誤りに関してこのグループを新しいカンツラー〔ゼッケンドルフ〕に告訴した。ゼッケンドルフは、他の幾人かの有名な人たちと並んで、宮廷の命令で、この告発を審理しなければならなかつた。彼の洞察、中立性、それらが結びついた愛情に満ちた説論は、直後に、両派の見事な和解をもたらした。聖職者たちは訴えを取り下げて、そして彼らは、共同で教義の浄化そして教会の平安に努力することを約束した。ゼッケンドルフだけは、この争いの調停で覚えた強烈な喜びを長く楽しむことができなかった。彼は、言及された調停が説教壇から読み上げられたまさにその日、一六九二年一月一日に亡くなった。そしてモイゼルヴィッツに埋葬された。彼が二度の婚姻でもうけた子供のうち、命永らえたのは息子だけであつたが、三年後、同じく亡くなつてしまつた。

私たちは、このドイツ人貴族が経歴以上に手に入れた、そして輝かしい歩みによって獲得し続けた、偉大で数えき

れない功績を見誤ることはないと思う。だが、まさにそれゆえに、それだけ一層確信して、私たちはゼッケンドルフの名前を、輩出されてきた優秀者の最上位に置くのである。彼が国家、宗教と教会、学問、そして人間社会に対してとりわけ同じように成功裡に貢献したことは確かである。彼には、宗教に対する大きなそして啓発的な熱意が満ち満ちていた。彼の身分で真の敬虔心に忠実であつた者は少なかつた。そして彼以上に敬虔心を広げることに参加した者は少なかつた。彼の人生、彼の著作物において、あらゆる徳目が、深く印象付けられた筆致で表現されている。「それは」特に、著しい実直さ、真実・正義への愛情、無私のふるまい、自分の援護・援助が必要な人たちに奉仕しようとする並外れた気概、なかならず、彼が自分の意図に反してアルベルティ (Valent. Alberti) によつて巻き込まれてしまつたプーフエンドルフ (Puffendorf) との衝突で証明された謙虚さと温和さ、誰彼に対する愛情に満ちた態度、そして称賛に値する勤勉さにある。彼は、人間に、そしてあらゆる身分に流行っている非行にとでも通じていたので、彼が持つていた、人間の気持ちをつかむ特別の才能を、ひとは褒めそやすのである。彼の国政管理は今でも、模範として挙げられている。彼は、自分の主君の名誉になるよう外交を行った。そして内政について彼は主君の利益と領邦の最善とを調和させることを知っていた。それゆえ、彼の場合、彼への請願の数、職務の数〔の多さ〕は、世間一般からの信頼を如実に象徴するものであつて、高い名声の賜物であつた。そこには、彼の知性、正直さ、すべてのものに及ぶ手際の良さがあつたのである。

大きな評判を博した、そして仕事に取り囲まれた一人の人間が、学問を力強く庇護することで満足したなら、このことは、並外れて彼の名声を上げることに関立つたであろう。また、学問に好意を示すことでその学識も正当なものになる。学問に好意を示すことは、権力と慈悲とをその最善となるよう行使することを可能にしてくれるのである。

そして、もしそれが、所有者が主張するのに弱い立場にある権利を、その全注目を受ける大きな心配を他にもしなから、絶妙なやり方で主張するのであれば、このことは賛美され褒め称えられるのに相応しい。学問に尽くされる善行以上に、確実に持続的に感謝される善行は決してない。ゼッケンドルフだけが、偉大な学芸支援者の一人であっただけではなく、当時の最も博識な人物の一人であった。彼は、先ず第一に、政治家を養成することになる次の知識を完璧に持っていた。全範囲に及ぶ法知識、政治、ヨーロッパ諸国の、とりわけドイツ帝国の国制、しかもとくに、歴史、すなわちあらゆる身分の人間に対して才智を素敵に教えてくれる先生、である。彼は、学術語そして大半のヨーロッパ言語を修得した。古代の著述家たちも最近の著述家もゼッケンドルフにとってはおなじみであった。そのうえさらに彼は、ドイツ語とラテン語で詩作した。ラテン語の詩作はとも見事であった。というのもドイツ語の詩作は当時、手本がとも少なかつたからである。だが、彼の神学に関する学識以上に彼の名声を高めたものは、何もなかつたのである。それについて、ひとは、厳密な事実として、それが神学者という人間に相応しいものであったと言うことができる。ゼッケンドルフは聖書の原文に熟達していた。彼は、そこから導き出されるあらゆる教義の性質、重要性、関連性を、たゆまず熱心に調査した。彼にとって、教会のあらゆる時代の歴史で何ら未知・不明のことはなかつた。そして彼は、神学上の争いを正しくかつ慎重に判定した。彼には、敬神の念が衰退する原因まで、また、教会に忍び寄る誤りまで深く見えていた。だから、こうした考察において、洞察力・熱心さと、節制および、熱狂さから自由な心情とを結合できているとは限らない多くの神学者よりも彼は優れているのである。身分ある人たちが、そしてそもそも教会に献身することのなかつた学者たちが、宗教事項について満足のいくほんの一部の学識ですら獲得しようとしたなら、いずれ不信神が頭をもたげてくることはできなかつたであろう。そして宗教の名誉は、その使命を持って

いないと考えられる人びとによって一層、守られることになるであろう。

この尊敬に値する人物の著作は、後世にあつて、私たちの賛辞以上に価値があるに違いない。私たちは今やそれらの情報を提供しよう。

1. 『ルター主義の歴史的・弁護的注解』(Coментарий исторический и апологетический де Lutheranism, sive de reformatione religionis, ductu D. Mart. Lutheri, in magna Germaniae parte aliisque regionibus, et speciatim in Saxonia recepta et stabilita, etc.)、フランクフルト、ライプツィヒ刊。一六八八年の初版、四つ折り版以後、一六九二年・一六九四年、二つ折り版。それ以後の版は、おおいにお公刊された。ゼッケンドルフは、本書をドイツ語でも出版しようとした。だが、彼の死去によってそれは妨げられた。その代わりに、ウルムの牧師エリアス・フリック(Elias Frick)が、新しい注釈を付けたうまい抜粋を次の表題で印刷させた。『詳史・ルター主義と宗教改革』(Ausführliche Historie des Lutherthums und der Reformation)、ライプツィヒ、一七一四年、四つ折り版。フリックのオランダ語訳が、一七二八年デルフトにおいて、銅版画付き二つ折り版三巻本で公刊された。本書は、エルンスト敬虔公の要請によつてわずかな「公刊」機会しか与えられなかった、ゼッケンドルフの極めて貴重な本であつたので、それは、一六世紀の偉大な教会改良を記述したその種の本すべての頂点に位置するにふさわしいものとなる。彼は本書を、イエズス会士ルイ・メーンブール(Louis Maimbourg)が一六八〇年パリで、十二折り版で公刊した『ルター主義史』(Histoire du Lutheranisme)に実際に対抗させている。すなわち、著者「メーンブール」が心得ていた見せかけ上の誠実さや抑制によつて、また、そこに織り込まれた文体の安直さ、無数の虚偽・中傷があつても、称賛が得ら

れていた『ルター主義史』に対してである。ゼッケンドルフは『ルター主義史』に対抗して、ザクセン選帝侯・侯爵公文書館、ブラウンシュヴァイク公爵図書館から彼に伝えられた史料の数が多ければ多いほど、それだけ一層明らかかな勝利で真実を示すことができた。ひとは、それを判断しようとするなら、ゼッケンドルフの著作による弁明・反論の意図を常に意識していなければならない。メーンブールの無秩序はゼッケンドルフの秩序となった。ゼッケンドルフは、宗教改革史の実際的狀況をとて正確に調査することで、また最良の原典から多くの有用な抜粋をすることで、ひとがさらけだしてしまうだけの冗漫さを回避することが可能となった。だが、本当にくだらない著述家は非難しなければならない。本書は、学識者による新しいかつ入念な努力に相応しい著作の一つである。それは一つの新しい刊行物であり、宗教和議まで「考察が」続き、言及された歴史の豊富な史料で充実したものとなっている。それは、ゼッケンドルフの没後に公刊され、別のやり方で解説が加えられている。最後に、本書がこうした補遺によつてものすごい意義を獲得したのであれば、本書の、反駁部分を顧慮した改訂・短縮は、私たちが信じるように、無用な提案とはならない。だが、私たちは、それが冗長な単なる提案になり得ることを恐れるのである。

2. 『ドイツ君主国』 (*Deutscher Fürsten-Staat*)、フランクフルト、一六六四年、四つ折り版。本書は、彼による増補版である。そしてビーヒリンク (Andr. Simson Bieching) の補遺が付けられたイエナ、一七二〇年、八つ折り版。ゼッケンドルフは、本書の中でドイツ領域の国制を研究し、君主の権限を論議し、そして君主たちと同様に臣民を教育し、賢明なる行動規則を教育する。かつてひとは、大学の講義に本書を使用していた。

3. 『エアフルト市における擁護の正義』 (*Justitia protectionis in ciuitate Erfurtensi, etc.*)、一六六三年、四つ折り版。

同様に『ザクセンによる、エアフルト市への公正な擁護の再度のそして必要な弁明』(*Repetita et necessaria defensio iustae protectionis Saxonicae in civitate Erfurtensi, etc.*)¹⁾ 一六六四年。エアフルト市に対するザクセン選帝侯国の権限を徹底的に擁護する前著を、ゼッケンドルフの友人であったにもかかわらず、ベークラー(Boecker)はかなり強烈に攻撃した。

4. 『ルター博士のミサ学説擁護のための歴史的・弁明的議論』(*Dissertatio historica et apologetica pro doctrina Lutheri de Missa*)、サギタリウス編(Casp. Sagittarius)、イエナ、一六八六年、四つ折り版。本論は、コルデモアの『悪魔とルターの会談物語』(*Cordemoy Recit de la conférence du diable avec Luther*)⁽¹⁾ に対抗して書かれている。

5. 『敬虔主義の肖像と呼ばれる、新しくラテン語とドイツ語で流布された文書、シュペーナーの序文付き、に対する報告と回想』(*Bericht und Erinnerung auf eine neulich im Druck lateinisch und deutsch ausgestreute Schrift, Imago Pietismi genannt, mit einer Vorrede P. J. Speners*)、ハレ、一六九二年、一七一三年、四つ折り版。「これは」私たちが上述の、神学論争へのゼッケンドルフの判定を褒め称えてきた一つの例証である。

6. 『ラテン語講義』(*Schola latininitatis ad copiam verborum et notitiam rerum comparandam, etc.*)、ゴータ、一六六二年、八つ折り版。彼はこの教科書を、ゴータ公の命令で、他の数人の学者と並んで制作した。とても喜んで公は、それが結ぶことができた偉大な果実を理解しながら、小論にまとめて下さった。

7. 『キリスト教徒国。キリスト教それ自体、そして無神論者およびその他の人々に対するキリスト教の防衛、並びにキリスト教の目的に照らして俗界・聖界身分の改良が取り扱われる。』(*Christenstaat*)、ライプツィヒ、一六八四年 [sic]、一六八五年、一六八六年、一七〇六年、一七三七年、八つ折り版。ザクセン・ツァイツ公のために生み

出された本書は、一部は、無神論者や自然論者に対する宗教の真理の証明、一部は、キリスト教徒のあらゆる身分における誤りをいかに除去すべきかの方法を含んでいる。それは、素晴らしい著述家から多くのものが集められている。

8. 『キリスト教会史概論』 (*Compendium Hist. Ecclesiast. decreto Seren. Ernesti, Saxon. Ducis, in usum Gymnas. Gothani, ex S.S. litteris, et optimis auctoribus compositum*)¹⁾ ライプツィヒ、ゴータ、一六六六年、八つ折り版、そして何度も「重ねられた」版。この教会史の有名な教科書にして、現在も読むに値する前世紀からの唯一の教科書で、ゼッケンドルフは、旧約聖書の歴史だけしか書いていない。それ以上進むための時間が彼にはなかった。

9. 『ドイツ国民の神聖ローマ帝国公法。すなわち、ドイツ国民の神聖ローマ帝国の記述』 (*Jus publicum Romano-Germanicum, das ist, Beschreibung des heil. Röm. Reichs deutscher Nation, etc*)²⁾ フランクフルト、ライプツィヒ、一六八七年、八つ折り版。彼は、しばしば言及された公の皇子のために本書を書いた。

10. 『キリスト教学説・実践の明白なる要点』 (*Capita doctrinae et praxis christianae insignia, ex 59. illustribus N. Test. dictis deducta, et evangelis dominicalibus, in concionibus a. 1677. Francof. ad Moen. habitis, applicata a P.I. Spenero*)³⁾ 一六八九年、八つ折り版。ゼッケンドルフは、『活動的なキリスト教精神の必要性と可能性』 (*Des thätigen Christenthums Notwendigkeit und Möglichkeit*)²⁾ という表題で刊行された「シュペーナの」説法集を、一部は、キリスト教の教化のために、一部は、ドイツ語に精通していない人たちのために翻訳した。かくして、当代においては、ゼッケンドルフと似たところのあった他の偉大な政治家で、学者たちの仲間マントイフェル伯 (*Graf von Mantoufel*) が、ラインベック氏 (*Reinbeck*) とイエルサレム氏 (*Jerusalem*) の説法集をフランス語に翻訳した。³⁾

11. 『ドイツ語講演集』 (*Deutsche Reden, an der Zahl vier und vierzig, sammt einer ausführlichen Vorrede von der Art und Nutzbarkeit solcher Reden*)、ライプツィヒ、一六八六年、八つ折り版。ひとは本書の中に、雄弁以上に真の国政上の識見を求めなければならない。彼はそこではほとんど、当時のダゲッソー (D'Aguesseau)⁽⁴⁾ であることが証明されている。

12. 『ルカヌスの教訓格言精選二〇〇に関する政治・道徳論集、およびファルサリアと呼ばれるルカヌスの英雄叙事詩』 (*Politische und moralische Discourse über M. Annaei Lucani dreyhundert auserlesene lehrreiche Sprüche, und dessen heroische Gedichte, genant Pharsalia etc*)、ライプツィヒ、一六九五年、八つ折り版。ゼッケンドルフは本書で、彼の愛する、そして実際に愛すべき詩人を、旅行中、心を鼓舞するために取り上げた。無韻詩で書かれた訳文は、訳文に欠けている言葉の美しさを、その正確さと簡潔さとであがなっている。そして優れている考察は、その価値をずっと保っている。この訳文を基礎にして新しい翻訳を作りたいのであれば、私たちは、その翻訳を、しばしば過度の称賛を受けているブレブーフ (de Brebeuf)⁽⁵⁾ のフランス語訳に対抗させることが可能であろう。

13. ゼッケンドルフが最初の、そして最重要な寄稿者の一人であった『アクタ・エルディトルム』 (*Acta Erudit.*) に、一六八三年から一六九二年までに掲載された、多くの文献情報。彼は、他の仕事から休養するために、本誌に従事した。これら書評の全目録は、すぐ「下」に挙げられるシュレーバーの本に見つかる。それらのうちの一つ、すなわち、一六八六年のブリニヨン (Bourignon) の著作に下された評判のよくなかった判断をゼッケンドルフは、一六八六年、四つ折り版、ライプツィヒで印刷された『ブリニヨン論の弁護』 (*Defensio relationis de Antonia Burignonia, etc*)⁽⁶⁾ で、自分たちの友人ポアレ (Poiret) に対して弁護した。

参照

シュレーバー (Dan. Godofr. Schreber) 『ゼッケンドルフの生涯と業績の歴史』 (*Historia vitae ac meritorum V. L. a Seckendorf*)、ライプツィヒ、一七三三年、四つ折り版。

ニケロン (Niceron)、『諸情報』 (*Nachrichten*)、第一七部、三〇〇頁以下。そこにある伝記は、宗務庁参議官ラムバハ (Rambach) の先行する記述を、大部分利用している。⁽⁷⁾

トマジウス (Christ. Thomasius) 「ゼッケンドルフ氏への弔辞」 (Trauerrede auf den Hrn. von S.)。これは、トマジウスの『ドイツ語小論集』 (*Kleine Deutsche Schriften*)、四九八頁以下 [sic] による。⁽⁸⁾

訳者あとがき

ここに訳出した「ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ ザクセン選帝公・ブランデンブルク選帝公枢密参議官 ハレ大学初代カンツラー 一六九二年没」は、

Schröckh, Johann Matthias. (1765): Veit Ludewig von Seckendorf, Churfürstl. Sächs. und Churf. Brand. Geheimer Rath, und erster Canzler der Universität Halle, gestorben im Jahr 1692, in: *Abbildungen und Lebensbeschreibungen berühmter Gelehrten*. Dritte Sammlung, Mit welcher der Erste Band beschlossen wird, nebst 10 Kupfern, vom 23sten bis zum 32sten. Leipzig, bey Christian Gottlob Hilschern, 1765. S. 285-300.

である。これとは別に訳者は、次の第二版も所有している (Abbildungen Ⅱ 肖像画が削除された表題に変更)。

Schröckh, Johann Matthias. (1790): Veit Ludewig von Seckendorf, kurfürstl. sächs. und kurfürstl. brand geheimer

Rath, und erster Kanzler der Universität Halle, gestorben im Jahr 1692, in: *Lebensbeschreibungen berühmter Gelehrten*. Neue umgearbeitete Ausgabe. Erster u. zweiter Theil. Leipzig, bey Engelhart Benjamin Schwickert, 1790. SS.269-280.

ヨハン・マティアス・シュレック (Johann Matthias Schrockh, 1733-1808) は歴史学者として有名である。彼が著した『有名学識者の肖像と伝記』(*Abbildungen und Lebensbeschreibungen berühmter Gelehrten*) の中に取り上げられているのが、ゼッケンドルフ (Veit Ludwig von Seckendorff, 1626-1692) である (通例は、ルーデヴィヒではなくルートヴィヒ [Ludwig]、SeckendorfではなくSeckendorffと表記される)。カメラリストであるゼッケンドルフについては、すでに別稿で紹介しているので、それを参考にしていただきたい⁽⁹⁾。

ここでシュレックの「ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ」を取り上げるのは以下の理由からである。第一に、ゼッケンドルフが没した後、彼が当時の、あるいは彼に続く世代にどのように評価されていたのか、を確認するためには、彼に関する評伝に直に当たる必要があるからである。ただしシュレックは、私たちの関心であるカメラリズム、カメラリストの観点からゼッケンドルフを見ているのではなく、キリスト教の歴史分析におけるゼッケンドルフを見ているのであり、当該分野におけるゼッケンドルフの地位・業績を高く評価していることに留意しなければならない。それは、彼がゼッケンドルフの著作として紹介している文献一三点のうちその多くがキリスト教に関わっていることから明らかである。

第二に、ゼッケンドルフがエルンスト公宮廷での職務を辞した理由をシュレックは仕事の「過剰さ」に求めている点で、シュレックに注目しなければならない。ゼッケンドルフの辞職の理由はいまだ、明らかではない。だが、エル

ンスト公宮廷における増え続ける職務に辞任の理由をシュレックは見出しているのである。⁽¹⁰⁾

最後に末尾の図は、シュレック一七六五年版の二八四頁と二八五頁の間に掲載されているゼッケンドルフの肖像版画である(シュレック第二版では肖像版画は割愛されている)。Digitaler Portraitsindex (<http://www.portraitsindex.de/db/apsisa.dli/ete>) の記述によれば、この肖像画は『Leipziger Sammlungen von Wirtschaftlichen-, Policey-, Cammer-, und Finantz-Sachen』(hrsg.v. G.H. Zincke). 7. Bd. 1751. に掲載されていたものらしく(訳者、未見)、作者は、Johann Christoph Sysang (1703-1757) である。これがその後、シュレックに転載されたようである。

訳者注

- (一) 本書は、Verzeichnis der Drucke des 17. Jahrhunderts (VD 17) に紹介されている『ルター博士のミサ学説擁護のための歴史的・弁明的議論』の表題頁に、Rectatio colloquii Lutheri cum diabolo としラテン語で記載されている。Louis Gérard de Cordemoy, *Récit de la conférence du diable avec Luther, fait par Luther même dans son livre de la messe privée et de l'onction des prestres*. 次の二つを参照せよ。
VD17 23:658581H (<http://gso.gbv.de/DB=1.28/SET=2/TTL=4/SHW?FRST=2>)
VD17 39:123108V (<http://gso.gbv.de/DB=1.28/SET=2/TTL=4/SHW?FRST=3>)
- (二) VD17 23:667223S 『活動的なキリスト教精神の必要性と可能性』は一六八〇年に公刊されている。Cf. VD17 23:667223S <http://gso.gbv.de/DB=1.28/SET=3/TTL=2/SHW?FRST=6>
- (三) フランス国立図書館 (BnF) の蔵書に、FRBNF31192729 (<http://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb31192729/PUBLIC>) があり、匿名でマントイフェルが訳した、一七三八年のライニンツク (Johann Gustav Reinbeck. 1683?-1741) の説教集が紹介されている。

- (4) Henri François d'Aguesseau. 1668-1751.
- (5) ブノブーン (Georges de Brébeuf. 1617-1661) によるルカヌス訳が、フランス国立図書館 (BnF) に所蔵されている。
- (6) VD17 [http://gso.gbv.de/DB=1.28/SET=10/TTL=1/CMD?MA_TCFILTER=N&MATCSET=N&NOSCAN=N&IKT0=&TRM0=&ACT3=*&IKT3=8183&ACT=SRCHA&IKT=1016&SRT=YOP&ADI_BIB=&TRM=defensio+relationis+de+antonia&REC=*&TRM3=\)](http://gso.gbv.de/DB=1.28/SET=10/TTL=1/CMD?MA_TCFILTER=N&MATCSET=N&NOSCAN=N&IKT0=&TRM0=&ACT3=*&IKT3=8183&ACT=SRCHA&IKT=1016&SRT=YOP&ADI_BIB=&TRM=defensio+relationis+de+antonia&REC=*&TRM3=))
- (7) Nicéron, Johan Peter, *Nachrichten von den Begebenheiten und Schriften berühmter Gelehrten mit einigen Zusätzen* herausgegeben von Friedrich Eberhard Rambach. 17. Theil. Halle, Verlag und Druck Christoph Peter Franckens, 1758. S.300-343. 本書には、ゼッケンドルフの肖像画が添付されている。本書は http://books.google.co.jp/books/about/Nachrichten_von_den_Begebenheiten_und_Sc.html?id=x9dIAAAAcAAJ&redir_esc=y で閲覧することができる。
- (8) Thomasius, Christian: Klag- und Trauer-Rede, welche, als, Der entseelte Körper Des Hochseeligen S. T. Herrn Geheimden Raths und Canzlers von Seekendorf, etc. Von Halle und Meuselwitz am 29 Decembris 1692. abgeführt wurde. Mit betrübten Gemüthe öffentlich gehalten Christian Thomas. JCrus. Chur-Fürstl. Brandenburgischer Rath Prof. Publ. zu Halle. in: *Kleine Deutsche Schriften*. 1701. Vorwort von Werner Schneiders. Personen- und Sachregister von Martin Pott. Ausgewählte Werke. hrsg. Werner Schneiders. Bd., 22. Olms Verlag. Nachdruck der Ausgabe Halle, 1994. S.547-566.
- (9) たとえば、ハンス・イェルク・ルーゲ、川又祐訳、「図書館員から枢密参議官へ」『政経研究』二〇一二年、四九(二)、一三二—一九八頁。
- (10) ゼッケンドルフ辞職の理由について、ルーゲは、残されているゼッケンドルフ関連文書に当たった結果、「正確な動機について、現在でも明確な、原典で証明される供述はない」としている。ルーゲ、川又訳、一五八頁。
- (11) *Sysang Sculptsit* (シサンゲ作) の略と思われる。

図 ゼッケンドルフの肖像



ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ
ザクセン選帝公・ブランデンブルク選帝公枢密参議官
ハレ大学初代カンツラー
一六九二年没(川又)

七三(二八五)

オーベルンツェンとモイゼルヴィッツの
ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ
ザクセン選帝公・ブランデンブルク選帝公枢密参議官
S.Sc. [シサング作]⁽¹¹⁾

